

播磨ヒストリア

播磨町の歴史をひも解き、その時代にタイムスリップして、当時の出来事をエピソードを交えながら紹介します。

播磨町郷土資料館 館長補佐 宮柳 靖
☎079(435)5000



▲数珠と棟札

エピソード 伍

230年続く愛宕塚の数珠繰り

播磨町鹿ノ川に、県指定文化財の愛宕塚古墳があります。古墳時代前期の円墳で、壺形埴輪や円筒埴輪などの一部が出土し、この地を治めていた人のお墓だと考えられています。円墳の直径は22m、高さは2.2mで、周りには幅4～5mの濠が巡らされています。

この小高い山の上に、村の人たちから「愛宕さん(愛宕神社 旧称は阿多古神社)」と呼ばれ、親しまれている小さなほこらがあります。いつ作られたのか定かではありませんが、寛延3(1750)年、姫路藩に出された野添村明細帳にそのことが書かれています。当時は、焼畑による新田開発も行われ、火の神を祀るほこらもそのころ作られたようです。

毎年8月24日には、ほこらの前で「無病息災、家内安全」を祈願する数珠繰りが行われています。大きな数珠が入っている箱の裏には、墨字で天明4(1784)年と書かれています。天明の大飢饉が前年におこり、多くの人が飢えに苦しみ亡くなっていることから、数珠繰りはこの年から始まったようです。鹿ノ川の数珠繰りは、直径3mもある

長大な数珠を車座になって「南無愛宕さん大権現」と唱えながら50回まわします。地域の人たちでつくる「愛宕講」によって受け継がれてきた伝統行事で、夕方になると子どもが、夜には大人たちが数珠繰りを行っています。数珠繰りの後は、お加持があります。世話人が、「健康でありますように」「勉強ができますように」などと神妙に唱えながら、子どもたち一人ひとりの背中をなでていきます。数珠の感触に「くすぐったい」と背中をよじらせる子もいます。

ほこらの中には、御厨子があり愛宕権現のお札が置かれています。御厨子の中は簾で見えませんが、お地藏様(地藏菩薩)が安置されています。8月24日の地藏盆(地域では愛宕盆)に、数珠を使った行事は仏教的ですが、唱えられているのは火の神・戦の神である愛宕権現です。権現とは、仏・菩薩が日本の神に姿を変えて現れたもので、神仏の行事を一体化させたこの数珠繰りは、230年近く続く誇りうる伝統行事だといえます。数珠箱の歴史が、刻み続けられていくことを願っています。